2-3.滝山寺鬼祭りにみる歴史的風致

(1)はじめに

滝山寺鬼祭りは、旧暦正月７日(現在は旧正月７日に近い土曜日)に行われる火祭りが特徴の祭りである。祭り当日の行事は、行列、仏前法要、鬼塚供養、庭祭り(田遊び)、火祭りである。火祭りに３匹の鬼面が登場することから、一般的に「鬼祭り」と呼ばれている。

(2)滝山寺鬼祭りの歴史

起源は鎌倉時代、源頼朝の祈願に始まると伝えられている。室町時代に一時廃絶したが、正保４年(1647)３代将軍家光から学頭青龍院亮盛に当年から毎年、滝山寺において天下泰平の祈願をするように命じられ、以後、鬼祭りは徳川幕府の行事として盛大に行われるようになった。明治維新後、徳川幕府の庇護を失い、さらに神仏分離が影響して明治６年(1873)に休止となった。しかし、明治10年(1877)以降、青木川に設置され普及したガラ紡の経済的繁栄が大きな原動力となり、明治21年(1888)に滝村により再開された。

図2-3-1　滝山寺鬼祭り(火祭り)

滝山寺の鬼祭りは五穀豊穣を祈る寺院の正月行事である修正会[1]と、大晦日の夜に悪鬼を払う宮中行事である追儺式[2]が変化した鬼祭り、火祭りが一体となった行事とされている。滝山寺の修正会に関する記述の初見は、嘉禄２年(1226)で、この時期に修正会が行われていたことは明らかである。また、天明２年(1782)成立の『三州瀧山寺人日法会記』にも滝山寺修正会鬼祭りについての記述がある。しかし、鬼祭りがどのように組み合わさって展開してきたかは明らかでない。ただし、鬼祭りに登場する鬼の面は室町時代前半期の作とされている。修正会に鬼が登場すること、鬼が登場する前に田遊びが演じられることも滝山寺鬼祭りの特徴である。

祭りに登場する鬼は、祖父面・祖母面・孫面の３匹の鬼であるが、かつては父面・母面も存在したと伝えられている。ある年の祭りの日に、鳳来寺の山伏と称する２人の男が来て「鬼面を我らに被らせよ」と要求した。鬼面を被る者は、本堂に籠ったり、滝に打たれたりして

[1] 寺院で正月に修する法会。旧年の悪を正し，その年の吉祥を祈願する。
[2] 大晦日(12月30日(旧暦))の宮中の年中行事であり、平安時代の初期頃から行われている鬼払いの儀式

７日間身を清めなければならないとされていたが、無造作に取って被り、祭りを行った。祭りが終わって、その面を脱ごうとしたところ、顔面にくっついて離れず、息が詰まって死んでしまった。村人は哀れみ、本堂の西に葬り、塚を築いた。今も鬼塚伝説として伝えられている。この時、父面・母面も２人と共に埋められたので、父面・母面は現存していないという。

(3)祭りの準備

鬼祭りの主役である鬼面をかぶる冠面者（かんめんじゃ）は厄年の男性から選ばれる。冠面者は、厄落としのために、７日間精進潔斎をして面を被る。精進潔斎の内容としては、四足の物、鶏肉、卵、牛乳も禁忌で、以前は別火（べっか）で男手のみで生活していたと伝えられている。現在は、60 歳以上の女性が作ればよいとされている。祭り当日の朝、冠面者３人と手引きで、滝山寺南東に位置する寺の草創伝説に関わり、近世の村絵図にも描かれている「三界（さんがい）の滝」と呼ばれる滝壷に行って水を汲んでくる。汲んできた水を風呂に入れて沸かし、最後の潔斎をして祭りに臨む。祖母面役がカマドロで火の番をすることになっている。

図2-3-2　三界の滝

鬼祭りの中心となる十二人衆も大役を無事に勤めるため、多くの準備を行う。十二人衆は「谷ノ衆」とも呼ばれ、滝山寺周辺の十二谷からの代表者を示す役職として現在も伝わっている。十二人衆は滝山寺を支援し、年貢・田畑の管理をする等の役目を担っており、年貢を徴収する集落的な単位が「谷」であったと考えられる。「谷」の存在については鎌倉時代に成立した『瀧山寺縁起[3]』に記述があることから、十二人衆も平安時代末には組織されていたと推定される。祭りの際、以前は十二人衆も冠面者と同様に旧正月元旦から７日間、宿において男性のみで精進潔斎していた。現在は宿泊こそしていないものの、宿を借りて、前日と当日の２日間、食事、練習、打合せに関して精進潔斎を行っている。

[3] 滝山寺の由緒・来歴を記した書物。著者は滝山寺の僧侶とみられる。

祭りの準備では、松明（たいまつ）作りもある。鬼祭りに使われる松明には、庭祭り用の大松明、冠面者の松明、火祭りに出る人が持つ普通の松明、子どもたちが持つやや小振りの松明がある。材料となる竹は寒のものが良いとされ、祭り終了後に次の年の材料を揃えておく。大松明に使われる竹は滝町の北に位置する丹坂（たんざか）町から調達し、それ以外の松明に使われる竹は十二人衆が所有する町内の山の竹やぶから調達している。大松明は十二人衆によって作られ、その他の松明は「滝山寺鬼まつり保存会」の会員が中心となって 30 名余りの人々が参加して作っている。松明作りは三門近くの広場で行われる。松明作りの技術は脈々と受け継がれており、継承者は会員たちへの指導に当っている。

図2-3-3　松明の作成

主要な役どころの他にも、警護役の棒突と呼ばれる人々や火祭りの際の火消しなど、様々な役割がある。祭りの諸準備も含め、これらの役割は、町内各地域の戸数に合わせて分担して執り行われる。

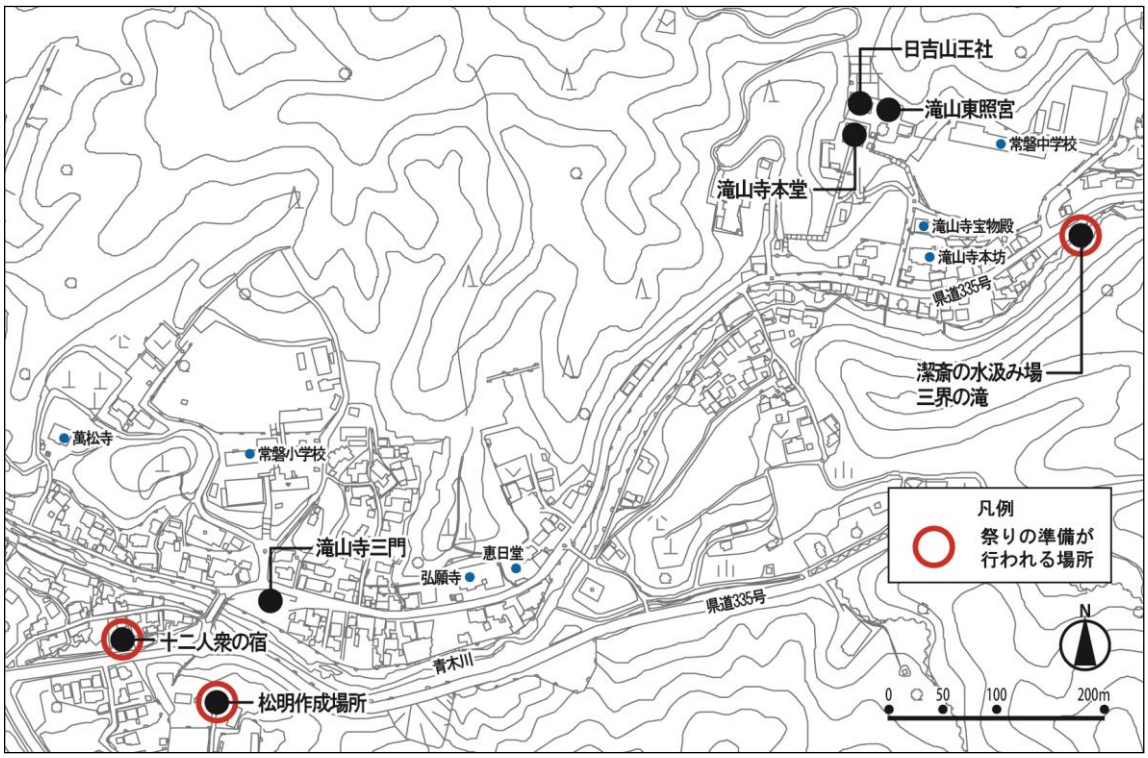

図2-3-4　祭りの準備が行われる場所

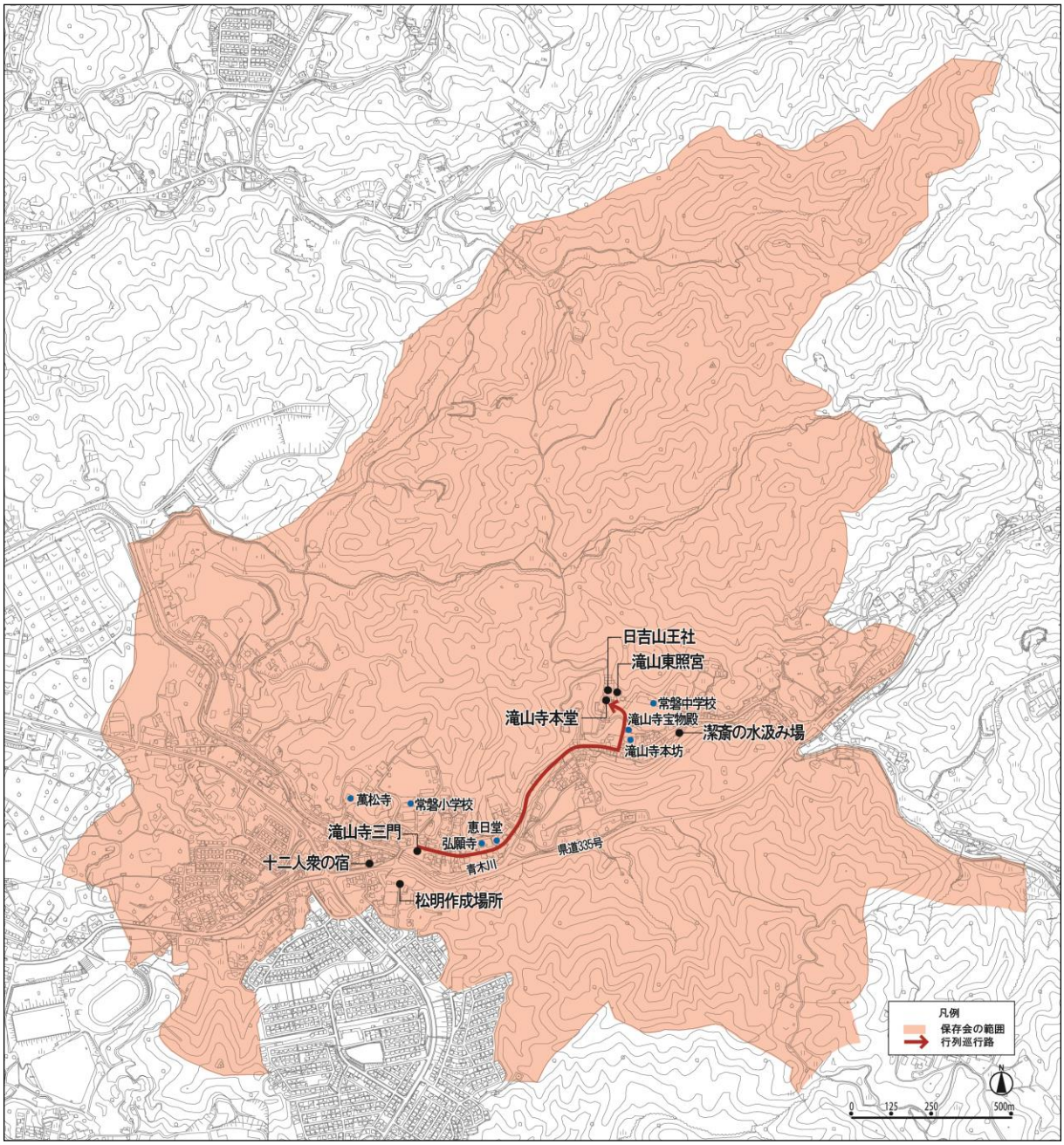

図2-3-5　滝山寺鬼まつり保存会の範囲(滝町)

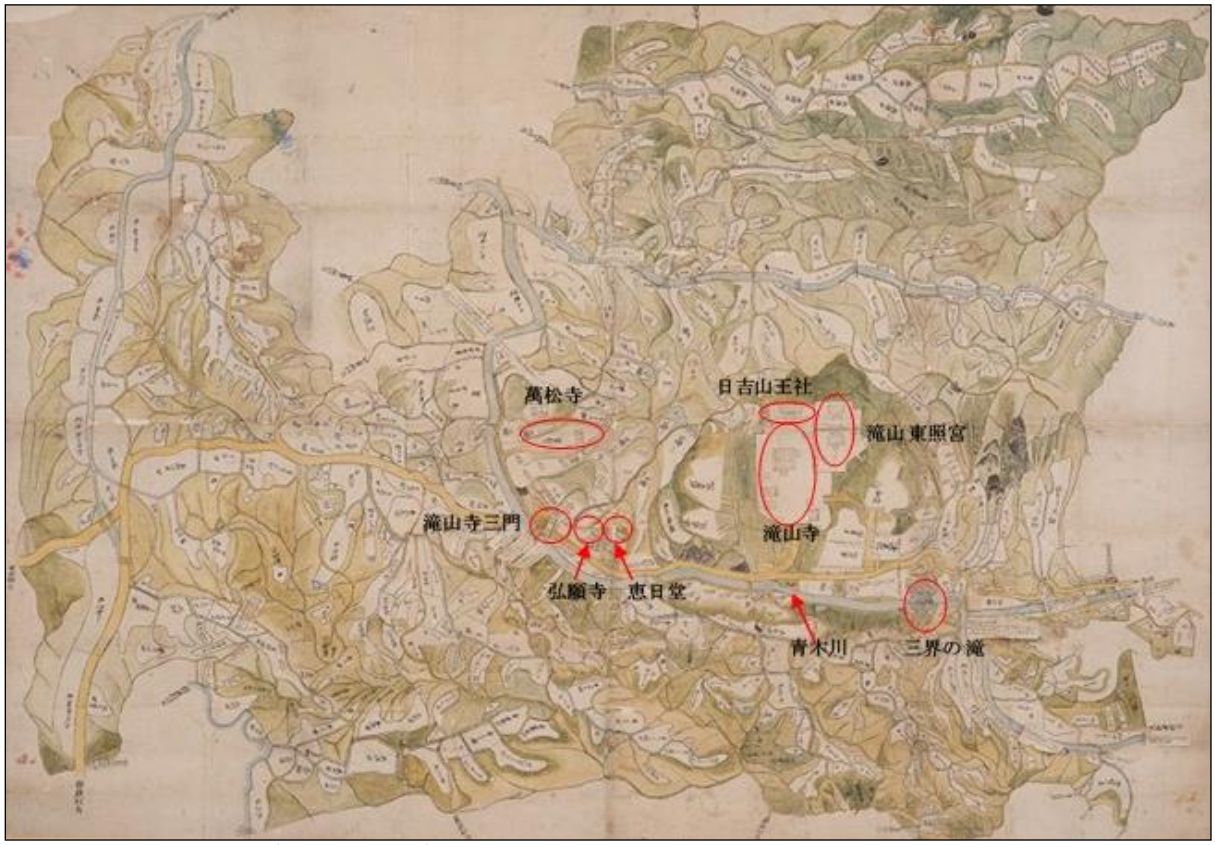

図2-3-6　瀧村地引大絵図(滝町区有文書)

(4)祭り当日

当日の行事は下記のとおり執り行われる。まず、「行列」は幕府将軍の使者としての住職が江戸から到着したことを表し、滝山寺の三門から滝山寺本堂に向かって出立する。行列には冠面者や十二人衆、住職等が参列する。この時、「瀧山寺鬼祭りの唄」が歌われ、町に祭りの始まりを告げる。２月の冷えた空気の中、静かなせせらぎと共に山峡を流れる青木川沿いに行列は進んでいく。唄の合間や道中休憩後の出立時にはほら貝が鳴らされ、山間の谷に響く。平地が少ない土地であり、一般には「谷ふさがり」といって避けることの多い寺の門前に並ぶ屋敷も多い。これらの屋根には、魔よけとして寺に向けて瓦製の大黒天・鐘馗（しょうき）・鳩などが載っている。

図2-3-7　滝山寺三門から本堂への行列

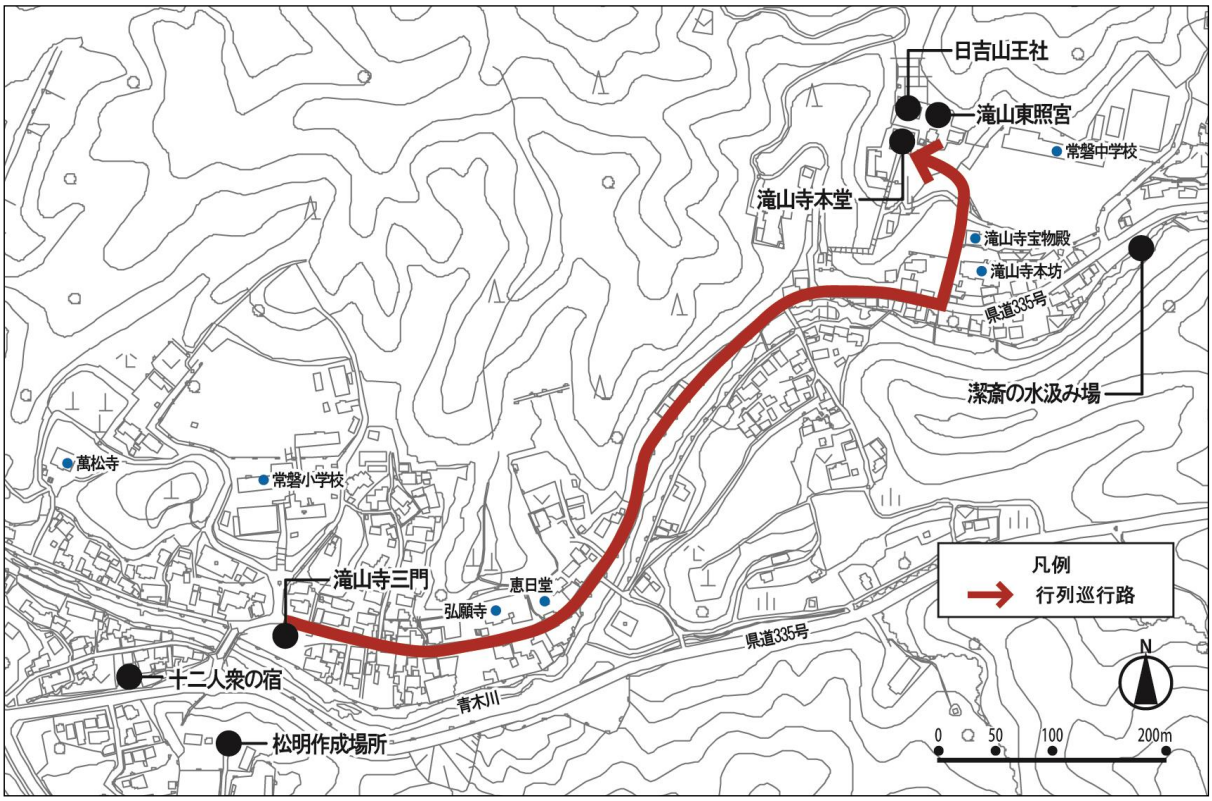

図2-3-8　滝山寺鬼祭り　行列巡行図

図2-3-9　庭祭り　昼寝の様子

行列が本坊へと到着すると、十二人衆は精進料理の饗応（きょうおう）を受ける。現在、山で採取したヤマクチナシを含むこの献立は祭りの見学者にも供されており、味覚で祭りを体感することができる。饗応の後、鐘楼の鐘と拍子木の音が、十二人衆の本堂への登山を知らせる。続いて本堂へと登山した住職により仏前法要が始まる。その最中、十二人衆は滝山東照宮・日吉山王社（ひよしさんのうしゃ）での長刀（なぎなた）御礼振り等、所定の場所で様々な所作を行う。住職による鬼塚供養も法要の半ばに執り行われ、豆をまいて供養を行う。ここから、庭祭り（田遊び）が始まる。十二人衆の中でも上役に位置する東次郎（とうじろう）、西次郎（せいじろう）が長刀御礼振りで悪魔を払った後、同じくコツボネ、福太郎が鍬を担いで登場する。昼寝や寝言というユーモラスな場面も交え、呼びかけや台詞で力強く掛け合いながら、田遊びの所作が演じられる。内容は、田打ち・代（しろ）かき・苗代作り・種まき・田植えなどの農作業の様子である。太鼓の音に合わせて十二人衆によって、この祭り独自の田植え歌が披露される。

歌が終わり火祭りに突入すると、滝山寺の内陣では半鐘（はんしょう）、双盤、太鼓がけたたましく連打され、ほら貝が吹き鳴らされる。この音と共に燃え盛る大松明を持った男達と祖父面・祖母

面・孫面を被った３鬼が本堂の外陣と回廊を駆け巡る。孫面の鬼は、初めは右手にまさかり、左手に松明を持って登場するが、途中から豊作を意味する丸餅を持って現れる。大松明を持ち乱舞するかのように走る人々、鳴り響く音、炎の熱気に包まれ、祭りは最高潮を迎える。大きく火の手が上がり、松明からはじけ飛ぶ火の粉が見学者の方へ降り注ぐと、歓声が上がる。見学者は火の粉を浴びて五穀豊穣や家内安全を祈願するからである。やがて、大役の拍子木とともに一斉に火が消され、静寂な一山に帰って祭りは終る。祭り終了後は、祭りの参加者や見学者が堂内に上がり、消された松明や松明の燃えさしを縁起物として持ち帰る。

図2-3-10　日吉山王社前での松明点火

図2-3-11　火祭り

祭りは「滝山寺鬼まつり保存会」を始め、地区全体で実施されている。一般の見学者にも供される精進料理は、地区の女性たちが協力して整えている。滝山寺の隣に位置する常磐（ときわ）中学校の生徒達は鬼の顔をかたどった土鈴等を製作し、バザーを実施して参加している。また、火祭りにあたっては地元消防団が滝山寺本堂屋根への事前放水を行い、本番中は万が一に備えて待機している。このように、地区全体で祭りを支え、盛り上げようという思いが活動となって表れている。

図2-3-12　精進料理

(5)祭り翌日及び翌年度への準備

朝８時から、十二人衆は宿の片づけを、保存会の有志は本堂周辺の片づけを始める。宿では使用した食器類を片付け、庫裡へと収納する。本堂付近では松明や火消しに使われた桶の水もそのままになっているため、桶の水抜き、煤（すす）や松明の欠片（かけら）で汚れた本堂内部の掃除を丁

寧に行う。松明は十二人衆が耕作している田へ返される。

また、鬼祭り執行日の１週間前の吉日に冠面者３人によってつくられた御供え用の鏡餅５つは冠面者に３つ、十二人衆に２つ、各組に１つ渡され、それぞれで小分けにして関係者や各戸に配られる。

また、片づけと共に次の年の祭りに向けた準備も進められる。松明に使う竹は寒のものがよいとされるため、毎年、鬼祭り後の寒さの強い２月下旬に十二人衆によって大松明用の竹や笹の準備が行われる。竹は十二人衆が所有する滝町内の竹やぶ等から調達され、一定の長さを測って伐採していく。竹の枝は払い、束にして１年間保管しておく。

片づけやこの時期の準備は、祭りを次の年へつなげるための大切な一つの過程である。

(6)関連する建造物

①滝山寺

役小角（えんのおづの・おづぬ）[4]が滝壺より得た薬師如来を祀るとする開創伝承がある天台宗寺院で、物部氏、熱田大宮司家、鎌倉幕府、足利氏、徳川幕府と時の権力者により寄進を受けた。源頼朝の従兄である僧寛伝の縁で頼朝の歯と鬢（びん）を収めた運慶・湛慶作の木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像（重要文化財）、『瀧山寺縁起』等、中世からの重要資料を多く所蔵している。

図2-3-13　滝山寺本堂（重要文化財）

図2-3-14　滝山寺三門（重要文化財）

滝山寺は『瀧山寺縁起』によれば、飛鳥時代、天武天皇の御代、当地に分け入った役小角が滝壺から拾い上げた薬師如来を本尊とし、吉祥寺と号して創建され、後に滝山寺に改められたという。滝山寺が本格的な寺院として成立するのは中世であり、滝山寺は、東海道筋の矢作東宿から足助（あすけ）（豊田市）、信州へ続く街道より分岐し、三河山間部へと至る道上の重要な場所に位置し、多くの人々、物資、文化の通過点であった。この頃、滝山寺は伽藍（がらん）として最盛期を迎えた。

鬼祭りの際、３鬼や大松明を持った人々が外陣、回廊を駆け抜け、本堂を焦がすほどの熱気に包まれる滝山寺本堂は、鎌倉時代末期から室町時代前期の建築で五間四面の和様である。

[4] ７、８世紀に大和の葛城山にこもって修行した呪術者であり、修験道の開祖といわれる。

鬼祭りの行列の起点となる滝山寺三門は、文永４年(1267)に飛騨権守藤原光延(みつのぶ)が建立したとされる。三間一戸こけら葺きの楼門で、逆垂木(さかさだるき)を恥じた棟梁が楼上から飛び降りたとする伝説があり、祭りの「行列」の際に歌われる「瀧山寺鬼祭りの唄」の歌詞にも表現されている。

②日吉山王社

滝山寺中興の祖仏泉永救(ぶっせんえいきゅう)により 12 世紀前半に鎮守として近江より勧請され、神仏習合の様相を今に伝えているのが、日吉山王社本殿である。全国的にも希少な七間社流造りで、身舎(もや)の内陣は七間以上の流造にみられる三間社を連結した構造ではなく、横長一室の一体型内陣として造っている点が注目される。現在の社殿は初代将軍家康公、３代将軍家光によって建立、修築されている。

図2-3-15　日吉山王社(市指定文化財)

鬼祭りの境内における祭礼は、日吉山王社及び後述の滝山東照宮神前での長刀御礼振りにより始まる。また、火祭りの松明は日吉山王社の前庭で灯されており、祭りでの重要な役割を果たす建造物である。

③滝山東照宮

滝山東照宮は、正保元年(1644)、３代将軍家光が家康公の生まれた岡崎城の近くにも東照宮を観請したいと考え、古跡であり家康公もよく訪れていた滝山寺に勧請するのが良いということになり、正保３年(1646)に滝山寺の境内東奥に建立された。久能山、日光と合わせて日本三東照宮といわれ、幕府から厚く保護されてきた。滝山東照宮の造営は、当時荒廃の一途を辿(たど)っていた滝山寺の再興に拍車をかけたとされている。

図2-3-16　滝山東照宮(重要文化財)

滝山寺、滝山東照宮の境内地には、石燈籠が林立している。これは、東照宮造営時に諸大名、岡崎藩主から奉納され、以後代々の岡崎藩主の寄進を受けたものである。

(7)おわりに

滝山寺の位置する滝地区は、矢作川支流の青木川流域にあり、三河山間部の入口にあたる。深山霊谷の観あり、川床は岩盤が表れ急渓流となっている。山地に接しながら、古代東海道の矢作川渡河点の一つであった大門地区へ通じる街道があり、中世以降も松平往還、大沼街道と三河山地奥部へ通じる街道筋にあったため発展した。特に滝山寺中興の祖仏泉が古代豪族物部[5]氏の加護により堂を築いた頃から発展を始め、中世には源頼朝、熱田大宮司家、足利家の寄進を受けて滝山寺は最盛期を迎えていく。近世には徳川将軍家から朱印地を安堵されたため、滝地区は朱印社寺領地としての景観を成していった。

図2-3-17　青木川

滝地区は山間に位置するため、元々は棚田での耕作が行われていたが、水田は減少しつつある。現在、滝地区には大沼街道を起源とする県道 335 号南大須鴨田線及び県道 477 号東大見岡崎線南側に新たな道路が開通したため、交通量が減少し、祭りの行列が歩く滝山寺三門から本堂までの道には旧道として歴史を感じる良好な環境の市街地が形成されている。

また、滝山寺、滝山東照宮、日吉山王社はひとつの境内に配置されており、中世から近世にかけての神仏習合の様相と各建物が一体となって織りなす景観を見ることができる。これは五穀豊穣を祈る寺の正月行事である修正会と宮中の行事である追儺式が変化した鬼祭り・火祭りが一体となったのを示す好例である。渓流に沿って通る街道を歩く行列に始まり、滝山寺の境内地を舞台に松明30数本を持込み、半鐘、双盤、太鼓を乱打し、ほら貝が吹き鳴らされる中で鬼が乱舞する。天下泰平・五穀豊穣を祈り、三河路に春を告げるといわれる滝山寺鬼祭りにみる歴史的風致は、岡崎を代表する風致となっている。

図2-3-18　滝山寺、日吉山王社、滝山東照宮

[5] 大和国山辺郡・河内国渋川郡あたりを本拠地とした有力な豪族。

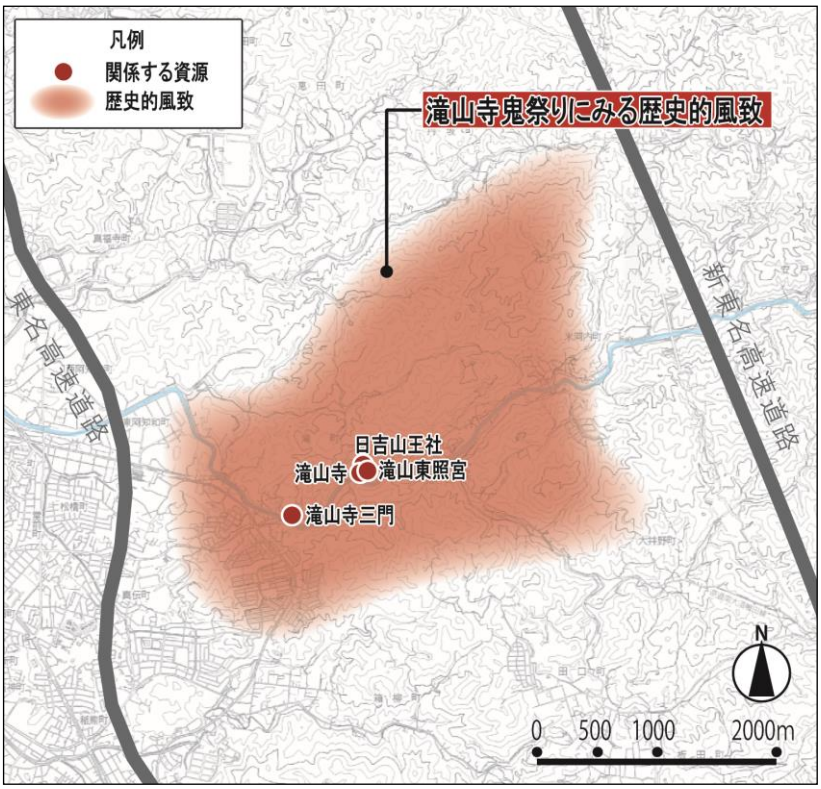

図2-3-19　滝山寺鬼祭りにみる歴史的風致の範囲

2-4.岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致

(1)はじめに

本市の中心市街地は、江戸時代の岡崎城の城下町と東海道の宿場町岡崎宿が母体となっている。東海道と矢作川水運による物資流通及び交通の要衝として発展し、西三河地方の政治・経済の中心であった。太平洋戦争の空襲により市街地の大部分が焼失したが、大規模な復興事業によって現在の市街地の原型が形づくられ、戦後も西三河の中心地としての地位を継承し続けた。

菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見神明宮大祭の「岡崎三大祭」は、江戸時代の町割りの一部や社寺の境内がそのまま残る旧岡崎城下を舞台に、地域の人々が大切に守り続け形を変えつつも毎年行われている。

(2)岡崎城下

江戸時代の岡崎は、神君家康公の生誕の地、歴代譜代大名の城下町であると同時に、東海道五十三次の 38 番目の宿場町、また矢作川水運の基地として、賑わいを見せていた。

岡崎城下を通る東海道は屈折の多さで知られ、世に「二十七曲り[1]」と呼ばれている。二十七曲りは、延享２年(1745)の『東海道巡見記』には「宿町数五十四町、廿七曲りと云ふ。」とあり、町数[2]とともに岡崎の町の特色を端的に表すものとして用いられている。東海道有数の宿場町でもある岡崎城下町は、寛文から元禄期頃までの江戸中期に東海道往還に面した町や周辺の町など合わせて領主支配の 19 町で成立していた。まちなみは東から西へと城内を経て連なり、19 町のうち東海道沿いの町数は、投町(現若宮町)・両町・伝馬町(現伝馬通)・籠田町・連尺町(現連尺通・本町通)・材木町・下肴町(現魚町)・田町・板屋町・松葉町(現八帖町・中岡崎町)の 10 町で、それらの町中を通る東海道の長さは合計で 36 町 51 間(約４キロメートル)もあり、東海道各宿の中で最も長いといわれる。

往還周辺の町数は、十王町・久右衛門小路町(現久右衛門町)・裏町(現花崗町)・上肴町(現花崗町・伝馬通)・六地蔵町・唐沢町・祐金町・横町(現本町通)・能見町(現能見町・能見通・東能見町)の９町である。近世岡崎城下町はこれら城下町廻り 19 町と城主支配外の甲山寺、大林寺、総持尼寺、松應寺、満性寺、随念寺、極楽寺など大小の朱印寺門前町が複雑に入り組んで構成されてきた。

---

[1] 天正 18 年(1590)岡崎に入城した田中吉政は東海道を城下町に通した。その際、城下の道を防衛の必要性から屈折の多い道とした。また、江戸時代初期の本多家の整備により、城北へ大きく迂回され、城までの距離を伸ばすことで間道を利用して防御することができた。

[2] 町(ちょう)＝60 間＝約 108 メートルの長さ。

天保末の『宿村大概帳』によれば本陣・脇本陣数は各３軒の計６軒で、これは小田原の８軒、箱根の７軒に続いて浜松・桑名とともに３番目の多さである。また一般旅行者のための旅籠屋は 112 軒で、これも宮（現名古屋市熱田区）の 248 軒、桑名の 120 軒に続いて３番目の多さである。以上の事実からも、岡崎宿は宿場町として東海道往来の重要な拠点の一つとして大きな役割を果たすとともに大きな賑わいをみせていたことがわかる。

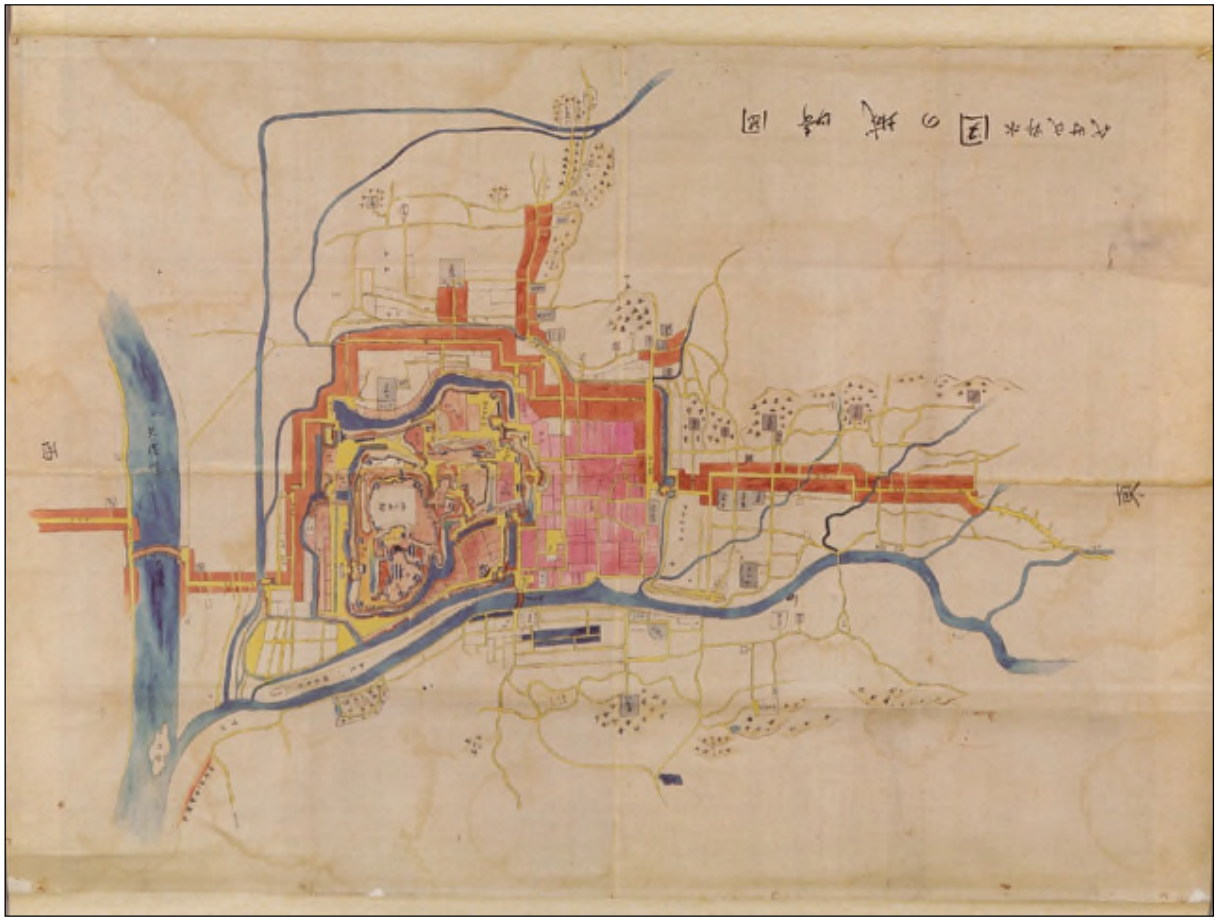

図2-4-1　岡崎城図（水野氏時代（正保2年(1645)～宝暦 12 年(1762)））

(3)岡崎城下の祭り

東海道有数の宿場町として栄えた岡崎城下は、その経済力や街道の往来によりもたらされた文化等により、城下の発展とともに民衆の力も蓄積され、江戸時代後期には町が実質的なまとまりとなり、産土神（うぶすながみ）や氏神[3]の神事や祭礼に合わせて華やかな祭りが行われるなど、次第に祭礼行事が興隆し、形態を変容させながら現在に受け継がれている。

江戸時代の庶民の楽しみは何と言っても祭りであった。岡崎城下では、主要な祭りとして、菅生（すごう）天王社（現菅生神社）、北野天神（現岡崎天満宮）及び能見神明宮の三大祭りが有名で、そ

[3] 江戸時代後期では、町・村全体を守護してくれる神を産土神・氏神とも呼んだ。

れぞれの氏子[4]が競って祭りを盛り上げた。当初は例祭日に神事が行われるのみであったが、江戸時代中期頃になると、東海地方で神輿や山車の巡行や、からくり・人形芝居・手踊りなどが盛んに行われるようになり、岡崎城下でも各神社が取り込んでいったとされる。そして江戸時代後期になると花火奉納や派手な祭礼行列が定着するようになっていった。

こうして江戸時代後期には、城下でも大きな神社であった菅生天王社と北野天神、能見神明宮において、氏子が主役となって参加する形が生まれ、内容も創作性に富み、地域生活に根ざした祭りとなった。そしてこれらは武家、町人の身分的な枠を越えて共有され、両者に支えられることとなる。

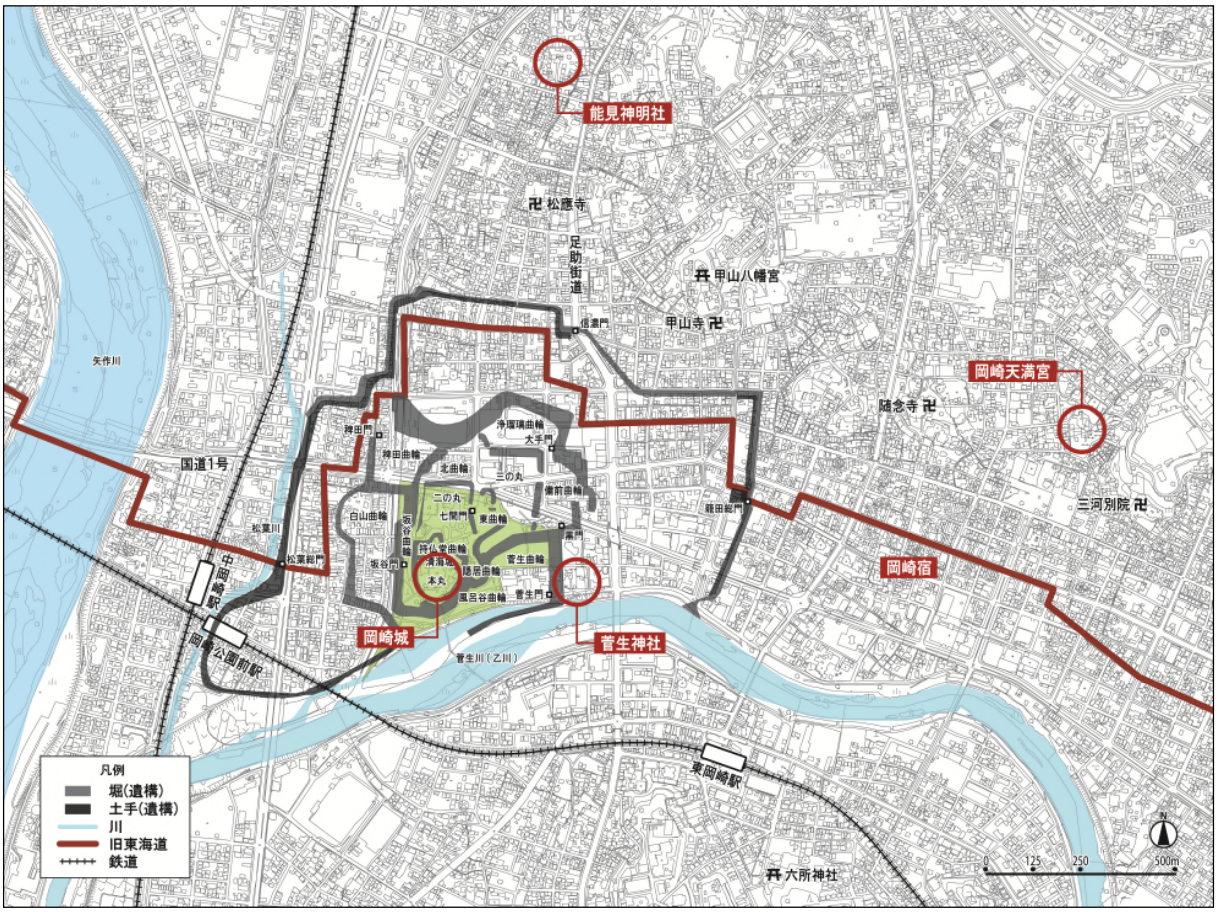

図2-4-2　岡崎城下と関連社寺等の位置図

[4] 産土神・氏神の町民・村民を氏子と呼んだ。

(4)菅生祭

①菅生神社の由緒

社伝によれば日本武尊（やまとたけるのみこと）が菅生の地を通過した際、高石（たかいわ）（現菅生町）に伊勢大神を勧請し吹矢大明神と称した。菅生神社が岡崎市最古の神社といわれるのはこの言い伝えをもとにする。永禄９年（1566）家康公が社殿を再建。その後、岡崎城内の当時の殿橋（菅生橋）の東側の地に移転し、歴代岡崎城主の崇敬を受けた城下の総鎮守となった。別名、菅生天王社。現在の本殿は明治 27 年（1894）、拝殿は明治 38 年（1905）に建てられたものである。祭神は、天照皇大神、豊受姫命（とようけひめのみこと）、須佐之男命（すさのおのみこと）、徳川家康公、菅原道真公である。

図2-4-3　菅生神社の境内

②菅生祭の歴史

厄災の除去を祈願した祭礼で、宝暦８年（1758）の『菅生天王宮年中行事』によれば、葦で作った８束の「疫柄」に疫神を負わせて流すというもので、疫病退散の厳粛な神事が中心であった。ところが、津島や吉田（豊橋市）の天王祭りの影響を受けたのか、文政５年（1822）の記録によれば、菅生川（乙川）に提灯を付けた鉾船（ほこぶね）が出され、管弦を奏し、船中から金魚花火[5]や手筒花火が奉納されるようになり、壮麗で賑やかな祭りに変化した。この背景には、城下における花火技術の拡がりがあった。文政元年（1818）には藩主上覧の花火大会が行われ、これには菅生町を始めとする城下各町がそれぞれ打ち上げを行っており、城下町の住民たちも花火の技術を習得していたことがうかがえる。江戸時代の例祭日は６月 15 日・16 日であったが、現在は７月 19 日に「宵宮祭」、20 日に「例大祭」、８月第

図2-4-4　鉾船からの奉納花火（大正 11 年（1922））

図2-4-5　鉾船での神事

[5] 水上に浮かび金魚が泳ぐように動く花火。川の流れを火の流れと化し観衆を魅了したと伝えられている。

１土曜日に「鉾船神事・奉納花火」の３つの祭事が執り行われている。「鉾船神事・奉納花火」は昭和 23 年(1948)から「岡崎市観光夏祭り(平成 26 年(2014)度より岡崎城下家康公夏まつり)」の花火大会との共催(合同開催)で行われ、岡崎の夏祭りとして市民はもとより、近郷近在から多くの見物客が集まる祭りとなっている。

③現在の菅生祭

炎天の下、菅生町・本町連・康生連・祐金町・六地蔵町・籠田町の各町からは氏子衆が長持ち唄を歌い威勢よく足を蹴上げながら神社まで、花火玉の長持ちを担ぎ練り込み行列する。先導を先頭に高張提灯と大うちわ、大人用の長持ちに小型の子供用長持ちが並び氏子が続く。行列は岡崎城総構え[6]の東端にあたる中央緑道を出発し菅生川(乙川)沿いを進む。

図2-4-6　長持ち行列の練り込み

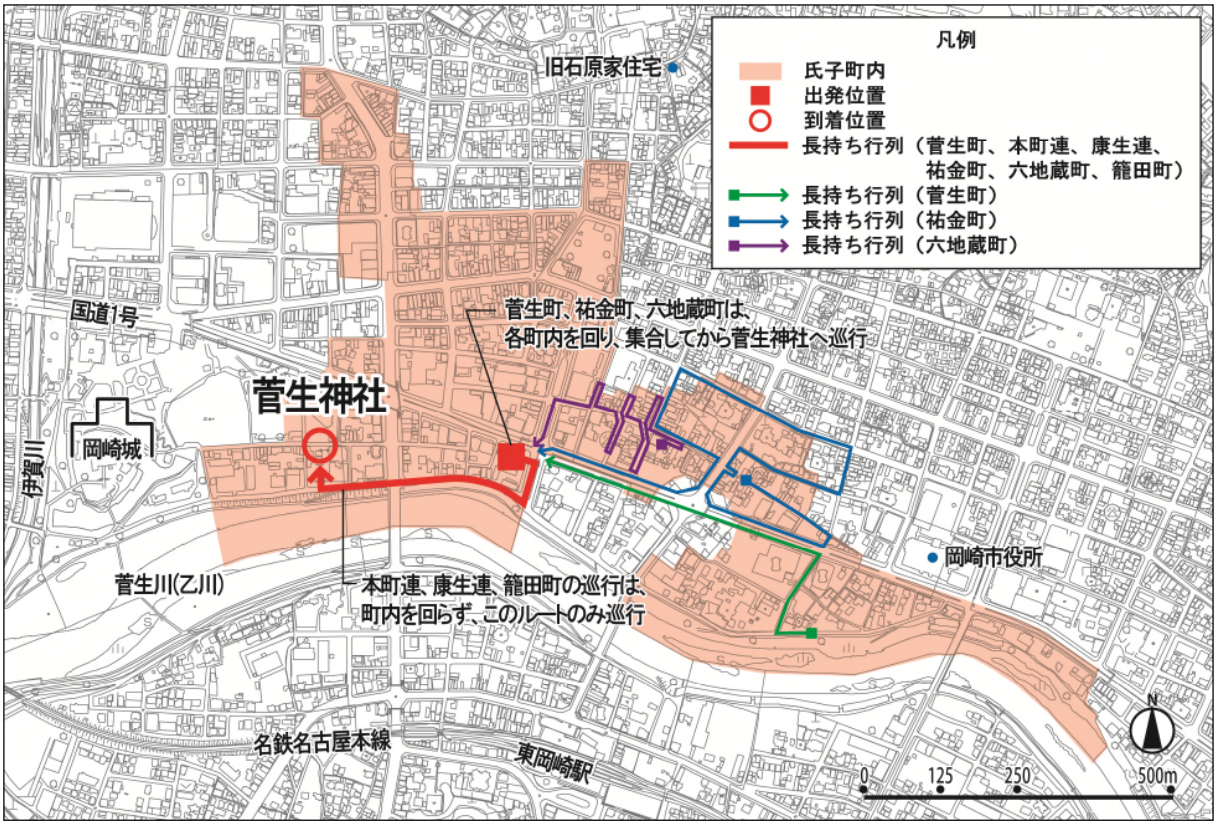

図2-4-7　菅生祭　氏子衆による長持ち行列巡行図

[6] 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や土塁、石垣で囲い込んだ日本の城郭構造をいう。

神社へ到着すると、神前に奉納者が３名並び手筒花火を奉納する。本殿での神事が午後２時に開始。次に午後２時 30 分、花火観覧のための桟敷が敷かれた河原に面して浮かべられた２艘の鉾船、天王丸・菅生丸に宮司らが分乗し安全を祈願する「船魂祭」が行われ、宮司の祝詞に続き「鉾船神事」が始まる。これは船上から葦で編んだ舟形の中に人形（ひとがた）、神葭（みよし）を乗せ、菅生川（乙川）に流し、疫神を流すという御霊会の儀式を伝える神事である。午後３時 30 分、神前にて奉納手筒花火が行われる。宵闇の頃午後７時には、船上の提灯塔に一年の月数を表す 12 個の提灯を立て並べ、下方に傘状に一年の日数 365 個の提灯を点じた天王丸・菅生丸より手筒花火を打ち上げ、金魚花火を奉納する。現在でもこのように古礼に基づき、儀礼や祭礼が執り行われ続けている。

図2-4-8　鉾船神事（神葭流し）

この美しく風格ある景観は文政元年（1818）より岡崎の名物であり、岡崎城天守を背景に現在も夜空を染める打ち上げ花火と鉾船を照らし川面に映る金魚花火・手筒花火は岡崎の夏の風物詩である。

図2-4-9　岡崎城天守を背景に菅生川（乙川）に浮かぶ鉾船と打ち上げ花火

(5)岡崎天満宮例大祭

①岡崎天満宮の由緒

元は総持尼寺（そうじにじ）の鬼門除けとして道臣命（みちおみのみこと）を勧請し、古くは北野天神、弓弦天神、伴天神と称した。元禄３年(1690)、菅原道真公を合祀して岡崎天満宮に改めた。そして東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた。社殿は昭和 20 年(1945)戦災で焼失したがその後再建され、現在の本殿は昭和33年(1958)に建てられたものである。祭神は菅原道真公・道臣命。

図2-4-10　岡崎天満宮の境内

②岡崎天満宮例大祭の歴史

元は東海道岡崎宿の伝馬町を中心に行われた祭礼で、氏子は城下の大半を占め祭礼は盛大であった。古き伝統を守り、祭礼日を変更せず、式月式日に齋行している。文政６年(1823)の『御祭礼警護行列帳』によれば、神輿や花笠山車・子供の手踊り等の行列が行われたとある。安政４年(1857)には藩主本多忠民（ただもと）が御馳走屋敷[7]で見物した。安政４年(1857)の『万留書覚帳』にも同様の内容が記されており、大人の手踊りが 29 番もあるなど、より派手になっている。その後、江戸時代後期には、奉納花火も上げられるようになり、特に昼間の打上花火は有名で「菅生さんの川花火、天神さんの丘花火」として知られていた。町内ごとに、だるま、将棋の駒、番傘など、特徴的な役物が打ち上げられたという。戦災後は、大規模な花火は民家の密集により休止されている。

③現在の岡崎天満宮例大祭

毎年９月 23 日から 25 日に齋行（さいこう）される例大祭は、氏子の一部の両町・中大門・中天神・東中からは氏子衆が長持ち唄を歌いながら天満宮まで、長持ちを担ぎ練り込み行列する。長持ち唄はどの町も基本的に同じ唄を踊りながら歌うが、イントネーションや細かい歌詞が町ごとに違う。

図2-4-11　長持ち行列の練り込み

練り込み行列は、社寺の門前や旧東海道など古くからの道筋を舞台に行われ、歴史や伝統を感じることができる。名物であった大規模な奉納花火は、規模が縮小され、現在は、唯一、中大門のみ、天満宮で花火を上げている。それでも、天満宮の歴史的な建造物を背景に奉納花火が上げられる様は、往時の風情をしのぶ

[7] 御馳走とは接待を意味し、屋敷は公用の役人等をもてなす、岡崎藩の迎賓館的な役割を持っていた。

ことができるとともに、境内の南に広がる東海道岡崎宿であった市街地に思いを馳せ、歴史や伝統を感じ伝える貴重な祭礼として重要で、形を変えつつも現在まで受け継がれてきている。

図2-4-12　岡崎天満宮の手筒花火

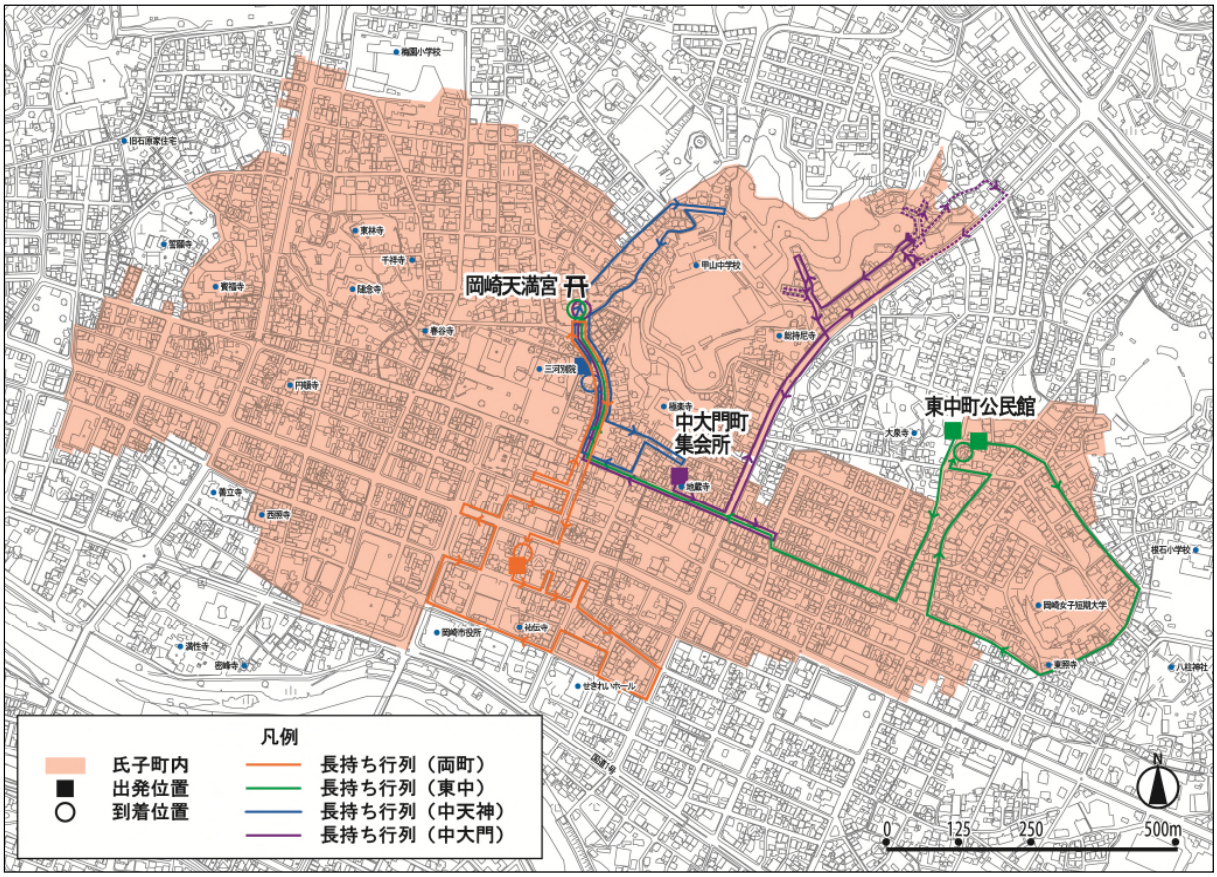

図2-4-13　岡崎天満宮例大祭の長持ち行列巡行図

(6)能見神明宮大祭

①能見神明宮の由緒

社伝によれば創建は鎌倉時代とされ、伝承によると材木町にあった稲前神社(現在は稲熊町へも移転)を、天正 18 年(1590)に田中吉政が岡崎城主になって城地拡大に伴いこの地に移転再興したといわれている。

寛延 2 年(1749)に社殿を再建、明治 42 年(1909)には拝殿が改築され、大正 13 年(1924)には神殿、神楽殿、石鳥居等が建立されている。祭神は、天照大神、萬幡豊秋津姫命、手力男命、豊受姫命、須佐之男命、市杵島姫命、五十猛命。

図2-4-14　能見神明宮の境内

②能見神明宮大祭の歴史

この祭りの起源については、少なくとも江戸時代中期に始まったものといわれている。幕末には材木町東部の氏子が中心となって山車や花笠を作り、祭りに使うようになった。その後、明治33年(1900)に神輿の曳き廻しが行われるようになり、現在行われているような祭りに変わってきた。祭りの重要な大行事は「御神輿渡御」と「山車の曳き廻し」である。「御神輿渡御」が大祭の静の象徴であるならば「山車の曳き廻し」は動の象徴と言えよう。

明治の頃までは二層式、三層式であった山車は、電線が引かれるなどの道路事情により、現在の山車へ改造・新造されたものの、いずれも趣がある。山車の曳き廻しも、戦争の拡大により、昭和 11 年(1936)にいったん中断されたが、昭和 27 年(1952)に復活した。各町独特の昔から伝わるお囃子を大人から子供へと、代々伝えて行くのも良き風習となっている。現在も「神明さん」の愛称で親しまれている。

図2-4-15　能見神明宮の神輿渡御

③現在の能見神明宮大祭

現在は５月第２日曜日及びその前日に行われる。江戸時代中期からほとんど変わることなく現代に引き継がれてきている「御神輿渡御」は、神明宮の御神体を神輿に移して氏子の11か町を巡る祭礼の重要な神事。境内には花笠梵天が参道の両脇に立てられ、東西には芝居の舞台と山車がずらりと並ぶ。先獅子と呼ばれる金色の獅子を先頭に進む数百メートルの行列は、まさに平安絵巻と呼ぶにふさわしいもので、各町に設けられた御旅所（おたびしょ）では町の安全と繁栄を祈願して御祓いが行われる。

図2-4-16　能見神明宮の奉納の舞

現在、神明宮の氏子には８台の山車があり、各町の特色を表した法被やゆかた姿も勇ましい大人や子供の手によって、各町独自のお囃子を奏でながら、江戸時代に重要な街道筋であった足助街道を始め、氏子町内を曳き廻される。明治頃までは二・三階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引き込み線等のため現在では平屋建ての形に改造されている。町の辻々で止められた山車の前面からは舞台が引き出され、管弦・太鼓に合わせて子ども達の手踊りが披露される。氏子の家の女児が踊り子となり、身内の人は山車について回って「花」と呼ばれる御祝儀を入れた包み紙を投げる。お囃子や踊りで彩られた山車曳きで、祭りの雰囲気は一層華やいだものとなる。夕方には各山車が神明橋に集まり、いよいよ祭りのクライマックス「山車宮入り」が始まる。午後７時を過ぎた頃、全ての山車の提灯を一斉に点灯し、高張提灯を先頭に動き始める。そして、およそ２時間をかけて、氏子各町をお囃子の音を響かせながら廻り神明宮に向かう。境内に集結した後、８台の山車の舞台では奉納の舞が華やかに行われる。この時、祭りは最高潮に達する。山車の練り歩きは、松本、元能見中、元能見南、城北、柿田、元能見北、能見北、能見中、能見南、材木二丁目の順番で、毎年１町ずつ繰り上げて行われる。前日祭の夜、神社境内において手筒花火が奉納される。打ち上げ後の花火の筒は縁起ものとされ、火災除けとして玄関等に飾られる。

図2-4-17　能見神明宮の山車の曳き廻し

表2-4-1　能見神明宮の山車

町	概要	山車
材木二丁目	建造時期：大正4年(1915)。黒・赤の漆塗り。彫刻「獅子」、「龍」、「象」、「仁王像」、「狛犬」等。天井には昇り龍を中心に彩色された四季の花鳥がとり巻く天井絵が描かれている。山車の前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
松本町	建造時期：昭和 35 年(1960)。各所に「矢作橋行列図」や「「天の岩戸図」等(江戸兵衛)の彫刻。平成 14 年(2002)、二世代前の山車に飾られていた彫刻「陰陽の龍」が復活。前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
元能見中町	建造時期：昭和 26 年(1951)(花車)。昭和 28 年(1953)改造。正面に「牡丹」の彫刻。左右に「神文五三の桐」の透かし彫りにし牡丹の花・藤の花の友禅夢樹の行灯仕立。友禅夢樹(久恒俊治)の行灯は全国伝統的工芸品入選。舞台を引出し手踊り披露。	
元能見南町	建造時期：昭和33年(1958)。総白木造りで一本の釘も使われていない。天井の真中に「龍」の彫刻。外側の前面と側面にも「龍」の彫刻が配置。引き出した舞台の上で子どもたち(小学生以下)が踊りを披露。	
元能見北町 城北町 柿田町	建造時期：不明。昭和 31 年(1956)材木町から譲り受けた。山車前面は彩色箔押しされた彫刻で装飾。明治頃までは二・三階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引込線等のため現在の形に改造された。	
能見北之切	建造時期：江戸後期に建造された高層式山車を明治中期及び昭和 31 年(1956)に改造。壇箱上山笈形、中備等の彫刻は文政5年(1822)瀬川治助重定の作で主題は「雲水龍」、「波文」、「唐獅子」、「雲鶴」等である。山車前面より舞台を引出し子どもによる踊りを披露。	
能見中之切	建造時期：昭和 28 年(1953)。彫刻「鳳凰」、「龍」(懸魚)、「蓮」、「鶴」(欄間)等。水引幕に赤地に能見中之切、腰幕に紺地に阿吽の獅子、見返り幕に赤地に能中。前面の引出し式の舞台で子どもたちが日本舞踊を氏子町内で披露。	
能見南之切	建造時期：明治初期。各所に極彩色の彫刻。前面の柱には「昇龍下龍」の目にさらしが巻かれており、これを外すと祭礼に雨が降るという言い伝えがある。辰年に巻き変えられる。山車から簡易舞台を引出し、踊子連が3曲ほど披露。	

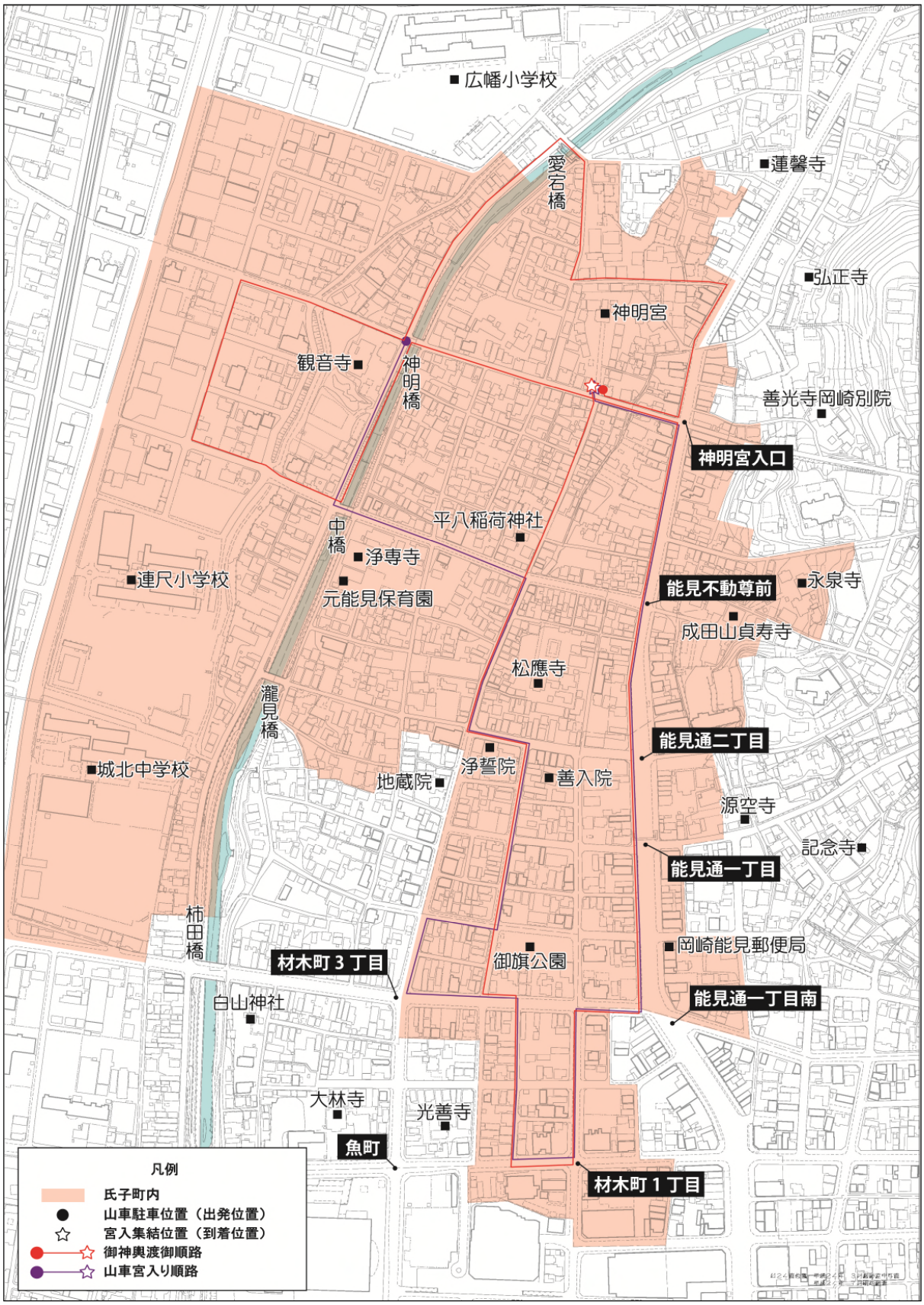

図2-4-18　能見神明宮の神輿渡御及び山車宮入り図(平成 27 年(2015))

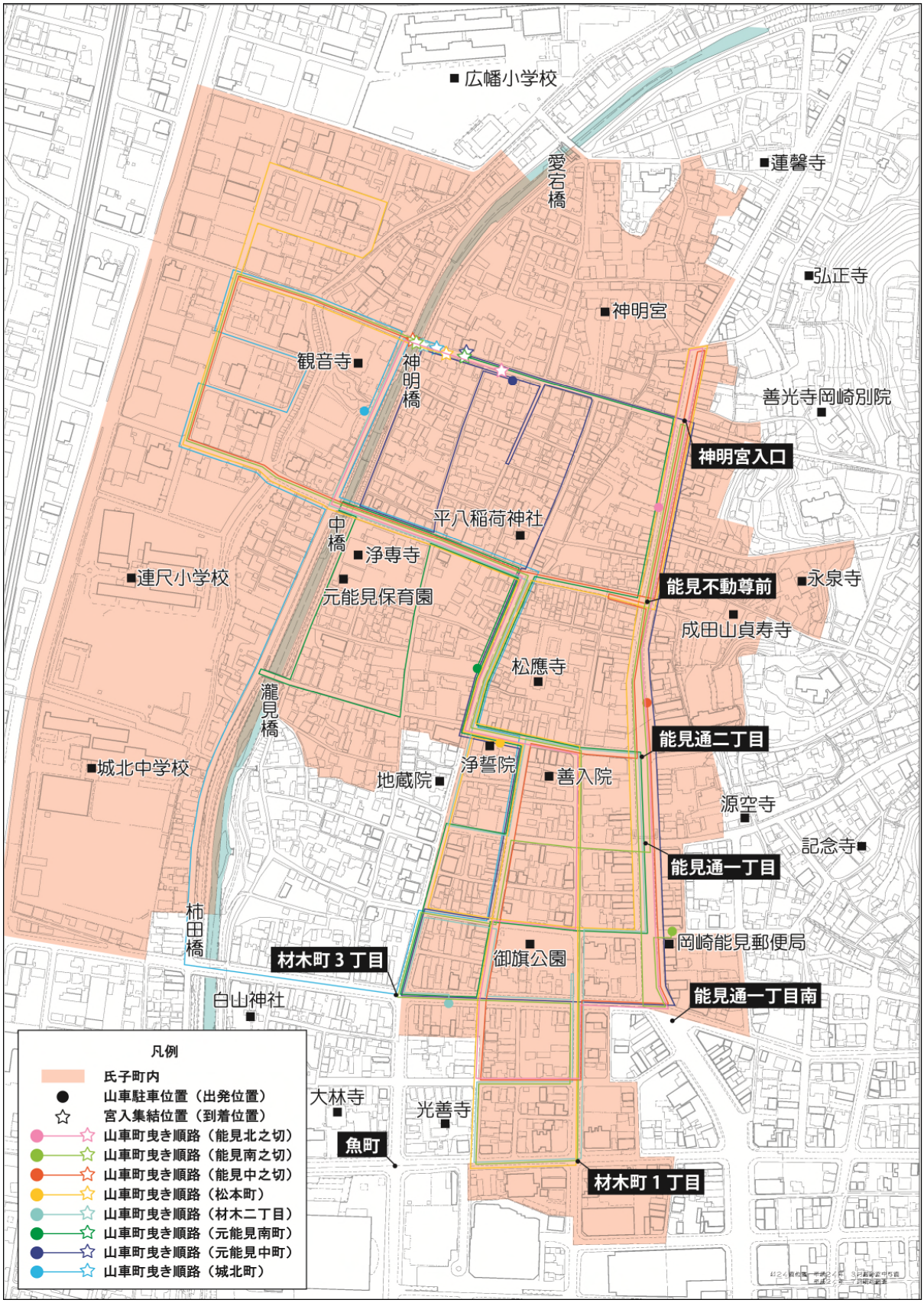

図2-4-19　能見神明宮の山車町曳き図(平成 27 年(2015))

こうした昔ながらの祭礼風景を今に残す祭りは少なく、中心市街地における岡崎の町人文化の伝統を今に伝える貴重な祭礼であり、巡行する町筋の歴史性と相まって、往時の風情をしのぶことができる。

市街地の多くで、狭あいな道路など江戸時代の町割りが感じられ、特に松本町周辺は、永禄３年(1560)創建の家康公の父・松平広忠の菩提寺・松應寺があり、江戸時代にはその門前町として、また大正から昭和 40 年代までは花街としても栄えた場所で、空襲により町の８割が焼失したものの、松應寺周辺の随所にその面影が残されている。祭りの時期には、岡崎城下の風情と伝統が感じられる場へと舞台転換するのである。

図2-4-20　能見神明宮境内に集結した山車

(7)おわりに

現在では町名変更がなされ、旧来の町名は通称となっているが、自治会組織やその運営、そして祭礼において旧町名のまとまりは存続している。お囃子の練習等を通して、町内の人間関係が築きあげられるなど祭礼形態や運営のあり方はその町の性格と密接に結びついており、祭礼の変容は町の展開の一つの表れでもあるが、祭礼は大人から子ども達へと伝えられ、伝統文化を継承していく重要な場となっている。

このように、神輿を担ぎ、山車を曳き回す氏子の勇壮な姿や奏でられるお囃子の笛等の音

色は、江戸時代から連綿と行われてきた祭りの華やかさや、歴史や伝統を反映した人々の心意気を今に伝えるものであり、旧岡崎城下の市街地を舞台に受け継がれてきたこれらの祭礼は、良好な景観を形成し、岡崎城下として栄えた往時の賑わいを彷彿（ほうふつ）とさせる。

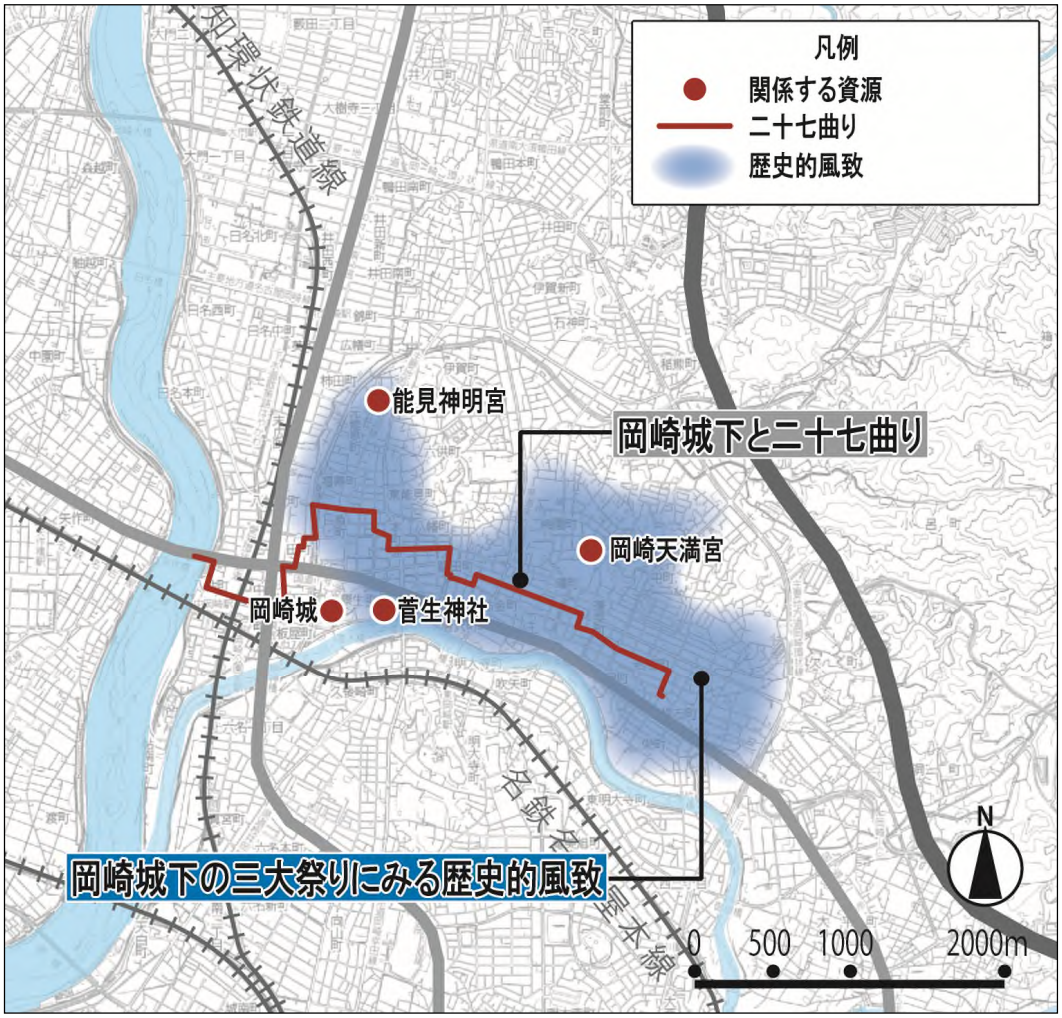

図2-4-21　岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致の範囲